



BE*BOY COMICS

Special Pride Special Pride Special Pride Special Pride Special Pride Special Pride Special Pride Special Pride Special Pride Special

スペシャル
Special Pride
ノベル
COMIC

NOVEL / 四谷シモーヌ
COMIC / 藤井咲耶



CONTENTS

Special Pride 恋愛までの射程距離 vol.1
3

Special Pride ANGELO E LUCIFERO vol.1
49

Special Pride 恋愛までの射程距離 vol.2
91

Special Pride ANGELO E LUCIFERO vol.2
132

Special Pride 恋愛までの射程距離 vol.3
163

Special Pride ANGELO E LUCIFERO vol.3
211

Special Resort
243

Special Private
265

First Impression
281

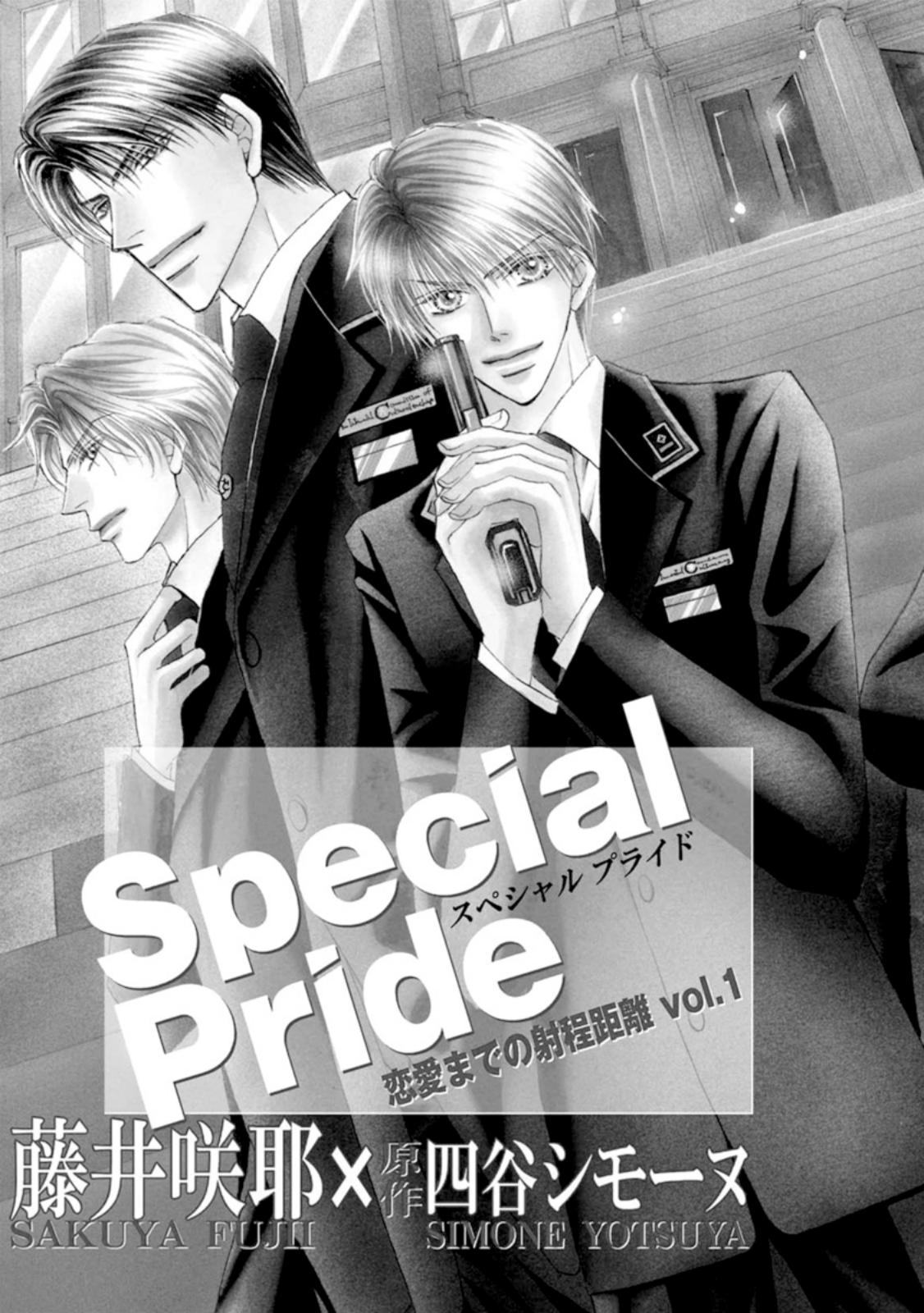
First Love
291

はつ恋
311

Shadows on your side
317

My Funny Valentine
325

あとがき
334



Special Pride

スペシャル プライド

恋愛までの射程距離 vol.1

藤井咲耶 × 原作 四谷シモーヌ

SAKUYA FUJII

SIMONE YOTSUYA





射撃用的に
向かって撃つ時
考えるのは

中央を
射抜くための
角度や
微妙な調節

あとは勘



ては

人の場合は？



よおーし!

つぎ
あ
次の20発を
当てればマジで
百発百中...!!

みやぞの
宮園!!

おと
部長が
呼んでるぞ!!



ガン

ガン

ガン

ガン

ガン

ガン

ガン

ガン

ガン



刑事部部長室

あ
あ
すま
すま

叔父さん！

何の用？

人がせつかく
新記録出す
ところだったのに…

誰？

見慣れ
ない…

こんな人
いたっけ？

なんかの
モデルか俳優
みたいだ…

—上司の部屋へ
入る時はノックの後
氏名・階級を名乗って
敬礼すること
常識だろう

と見たら、いきなり

ムカ。

…失礼しました

俺は……じゃなくて

でも
えらそつで

私は警視庁刑事部
一課所属 宮園陸
捜査長であります……

苦手な感じ——

部長はずいぶんと
部下を甘やかして
おいでのようです

その成果を買われ
何とか警視庁に入庁
できた——

このような
経歴でしたかね？

存じています

面目ない
彼は……

しかも外へ
△ミカよ……

幼い頃に母親を亡くし
中学生の頃 警察官だった
父親が死亡

その後叔父である
部長の実子同様に
育ち 大学生の時には
射撃でオリンピック
銀メダリストとなり

なんとか入庁……？

部長!!

この人
なんなん
ですかっ

いしなナニナニ

部長

かあ
あ

あ
あ

……お

— 警視庁 刑事部
一課 所属：
高 原 弘 毅 警 部 補 だ



アイシーン？

でもやっぱり
見たこと
あるかな…？

あれ…？

高^{たか}原^{はら}君^{くん}は
半^{はん}年^{ねん}前^{まへ}に
アイシーン
出^{しゅつ}向^{こう}して
るから
ね

見たこと
ないのは当然^{とうぜん}だよ

おな
同^{どう}じ
部^ぶ署^{じょ}なん
て
…見^み
たこと
ないしっ

なん
でっ
赤^{あか}
くなる
んだっ
俺^{おれ}っ

国^{こく}際^{さい}文^{ぶん}化^か交^{こう}流^{りゅう}機^き構^{こう}

各^{かく}省^{しょう}庁^{ちょう}から
の
出^{しゅつ}向^{こう}人^{にん}員^{ごん}た
けで
構^{こう}成^{せい}さ
れて
い
る
内^{ない}閣^{かく}官^{くわん}房^{ぼう}
直^{ちく}轄^{くわつ}機^き関^{かん}で
ね

名^な前^{まえ}の
通^とり
世^せ界^{かい}各^{かく}国^{こく}
の
文^{ぶん}化^か交^{こう}流^{りゅう}
を
図^ずる
た
め
の
組^ぐ織^し
だ



でもそんな人^{ひと}が
俺^{おれ}に
何^{なに}の
用^{よう}…

実^{じつ}は
ね
陸^{りく}

はあ…

何^{なに}な
世^せに
か



きょう
今日からおまえも
アイシー
I C C に出向して
ほしいんだ

えーっ

どうしてっ
叔父さん俺には
次の
オリンピックに
集中しろって!!

それは
そうなん
だけど

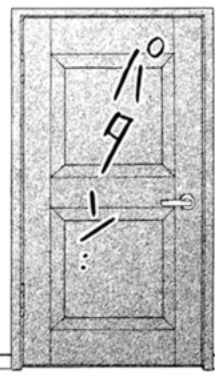
あーだ
ニーだ

部長

申し訳
ありませんが
席を外して
頂けませんか?

やあ





何があつても
口答えは許さん

解ったか!



おまえの出向は
決定事項で
今日から俺が
おまえの上司だ



解わかったら
返へんじ事をしろ!!

やつぱり
いいのは
顔かおだけだあ!!
オニヤミ...

わわかく
まましたっ
ましたっ



メンバだいーも20代が
ほとんどの若い
組ぐみ織おらしいけど

...
アインシュタイン
は



仕し事ごとが仕し事ごとだけに
服ふく装そうや礼れい儀ぎには
厳げんしいらしい

だこからつて
こんなのばつかり
だつたら先さきが
思おもいやられるなア...

着ついたぞ
ここが...

ガッ



うわわ
—
かわいわい
宮みや園ぞの君くん
だやねえ?!
—
♡

ああっ?!

...



おい待って

お茶飲む?

驚いてるだろー?

噂どおりだねっ♡

!!

!!



なんだこのメンバーー?!

おいしいかげんにしないか

確かに服髪も元儀もキレシつ...

もっと紳士的にこう...

初めまして リッキー

みやこの
宮園です

よろしく
お願いします

私がチーフの
神崎明人だ

話は君も
聞いているだろうが

このICCの
表向きの目的は
世界各国との
文化交流だ

しかし

本当の目的は
国際会議の際の
自国及び他国の
要人護衛……

……聞いて
ません!!

メンバーも各省庁から
集められた選り
すぐりのエリートだ

外務省からは
鈴木卓也

大使館員時代から
各国首脳と
面識がある

小野信一は
財務省から
出向している

この若さで
主計局の
次期局長とも
言われる程の
才がある

ロンドンの
シンクタンクから
招聘された
加持恭介は

国際政治の
プロである上に
美術にも
造詣が深い

そして警視庁からの
高原弘毅は
一昨年稲本総理の
S.P.を務めた際に
大きな功績を果たした

—あ！

どこかで
見たことあるって
思ったのは
テレビのニュースだ！

総理が
テロに遭った時
総理をかばって…

でも確か
あの時SPが
一人亡くなったんじゃない？

宮園君？

でもそんな人が
警視庁から
出向してるなら

なんで
俺みたいの
まで…

あれのせいだよ

しかも犯人を追って
見事犯人を
射殺したっていう…

この人が…



東京で
幕開け

イタリアを
経て

アメリカで
千秋楽を行う

政府が企画した
歌舞伎公演や
能衣装、茶の湯の道具などの
世界展示ツアーがあるんだよ



もちろん
本当の目的は
違う

各国首脳の
話し合いの場なんだ
主に最近頻発して
いる国際テロに
ついてのね

ところがそれを
コントラパツに
かぎつけられた――



コントラ...

バス?

かかひなア
もう

コントラパツ

国際的に
有名なテログループの
名前だよ

イタリア語で
意味は「却罰」

金のために
暗殺を請け負って
おきながら

正義の味方取りで
「他国の文化や利益を
搾取する者に
却罰を」…なんて
欧米各国の要人を
抹殺してる



最近では
そのターゲットに
日本の要人も
含まれるように
なった：

—もしかして！

おとしいなもとうり
一昨年稲本総理を
狙ったのも：？！

コントラパツソだ

事前に
予告があった

そして今回も—

：以前の時は
高原の活躍で
総理は無事だった

世界ツアーは
必ず失敗する





そこで

カツ

しかし
今回はいつ
誰が狙われるか
わからない

君を
スカウトした

銀メダリスト君!!

外部にも
応援はあおぐが
彼らに本当の
目的を告げる訳
にはいかない

世界ツアーの成功
各国要人との会合

コントラパツソの
テロの阻止…

何より
要人警護…

高原の
パートナーとして
要人警護
よろしく頼む!

ちよっ…

え?



Special Pride

スペシャルプライド

ANGELO E LUCIFERO vol.1
アンジェロ エルチフェロ

四谷シモーヌ
NOVEL SIMONE YOTSUYA

藤井咲耶
ILLUSTRATION SAKUYA FUJII

真昼の気怠い光が室内に満ちていた。壁にはルネッサンス期の絵画が等間隔に並んでいる。

その一点の前に、男はいつものように立っていた。仕立てのいいスーツを身に纏い、磨き上げられた靴を履いて。

背後から近づく足音にも振り向かない。

そして、じつと絵を見つめたまま、独り言のように呟いた。

「遅かったね。今日はもう来ないんじゃないかと思つたよ」

すぐに、言いわけが返ってくるのを拒むように首を振る。

「いや、いいんだ。何も私達は待ち合わせをしているわけじゃない。お互い、都合のいい時間にここへ来て、うまく顔を合わせられれば一緒に午後を過ごしているだけのことだ」

それから、ようやく振り向いた。

薄い唇には軽い笑みが浮かんでいる。が、その淡い虹彩の瞳には、やや苦しげな色があった。

「しかし、君にも解つてゐるはずだ。初めて出会った時から、私は君に夢中だ。朝から晩まで君のことばかり考えている」

と言つて、両手を差し伸べ、目の前にある体を搦め捕る。

「胸が張り裂けそうだよ。私をこんな気持ちにさせた君が憎い。だが、愛しくて愛しくてたまらない」

切ない口調で、そう囁く。

「頼むからそろそろ聞かせてくれないか。君はどうなんだ？ 君も少しは私のことを愛してくれているのか？」

わずかな沈黙。

男の肩に埋まる頭が、かすかに動く。

ほんの小さく頷いたのだ。

「よかつた……」

男は深い安堵の息をつき、捕らえた体を強く抱く。

「では、これは契約の証だ」

その唇に口づける。

「今から君は私のものだ」

何度も、何度も口づける。

「よく憶えておきなさい。君はもう一生、私だけのものだよ」

朝の光がカーテンから漏れている。

「う……ん……」

加持恭介は、小さく呻いて反転した。

指先に堅い筋肉を感じる。昨夜、自分を抱いた腕。

その向こうには厚い胸がある。昨夜はびつしよりと汗に濡れ、加持をベッドに押し潰していたのに、今は乾いて、穏やかな呼吸を繰り返している。

ちようど心臓の上あたりに、薄赤い斑点が散つている。記憶にはないが、たぶん自分がつけたのだろう。

普段ならそんなことはしない。他人からの愛撫ならいくらでも受け入れるが、自分から何かすることは決してない。

加持は常にそうだった。それが気に入らないと言ふ人間とはベッドをともにしない。我慢じゃないが、そういう相手に不自由はしていない。

「でも、まあ昨夜は久しぶりだったし……」

このところ仕事が忙しかったので、この男と週末を過ごすのは一か月ぶりだった。

そのせいか男は激しかったし、自分もつい夢中になつてしまった……。

そんなことを思い出し、柄にもなく目の縁をかすかに赤く染めながら、加持は男の肩を軽く揺すつた。

「ねえ、コーヒー淹れてよ」

だが返事はない。

今度は大きく揺すつてみる。「ねえ、コーヒー淹れてつてば！」

しかし、やはり返ってくるのは規則的な呼吸音ばかり。

「しよーがねえなあ……」

加持は全裸のまま起き上がり、手近にあったガウンを纏った。

寢室を出て、階段を下りる。

途中の踊り場にある窓からは横浜港が一望できる。

ここは横浜にある古い洋館だった。ロンドン暮らしの長かった先々代、つまり男の祖父が建てたのだという。

それだけにキッチンも前近代的で、湯はやかんで沸かさなくてはならないし、コーヒー豆は手動のミルで挽かなくてはならない。

最初は面倒だと思つたが、慣れてしまえばたいした手間ではないし、出来上がったコーヒーはコーヒーメーカーで淹れたものよりずっと美味しい。

それに、洋館ならではの広い居間や、カードルームやビリヤードルームの重厚な造りも気に入っている。全ての家具をヴィクトリア風で統一してあるのも、加持の好みに合っていた。

が、ソファには脱いだジャケットやシャツが散乱し、テーブルには飲みかけのワインボトルや鬻りかけのパンが転がっている。

仕方ない。所詮、独身男の一人住まいなのだ。

週のはじめにハウスキーパーが来て家中をピカピカにしていくが、週末にはこんなありさまになっている。

「少しは自分で片づけたらどうだよ」

ネクタイや靴下を蹴散らしながら二階に戻った時も、独身男こと神崎明人は、相変わらず安らかな寝息を立てていた。

その顔は、いつ見てもびっくりするほど整っている。広く秀でた額、高くまつすぐな鼻梁、薄い唇からがっしりした顎の線は、まるでミケランジェロの彫刻だ。

百八十六センチという日本人離れした長身や、それに見合った広い肩、逞しい腕や厚い胸などもそうだった。

しかも、艶のある漆黒の髪、意志の強そうな太い眉、生き生きとした明るい虹彩の瞳が彼に人間的な魅力をも与えている。

もつとも今やその黒髪は好き勝手に寝乱れている上、明るい虹彩の瞳は固く閉じられ、がっしりした顎には無精髭が伸び放題になっているのだが。

「ほんつと、しよーがねーなあ」

加持はため息をつくとき、男に背を向け、ベッドの上に腰かけた。

その瞬間、背後から腕を引かれた。

「わ、バカ、零れる……っ」

と叫べば、低い声で囁かれる。

「いい匂いだな。コーヒーか？」

加持は視線だけを背後に向けた。

「言つとくけど、あなたの分なんて淹れてないからな」

「だつたら、それを分けてくれればいい」

神崎は加持の手からカップを奪い取ると、

あつという間に飲み干した。

「ああ、俺、まだ一口も飲んでなかったのに……っ」

加持の悲鳴のような声を聞いても、悪びれた様子は全くない。

「そうか、そりや悪かつたな」

と言いつつ、彫刻のような顔に嬉しそうな

笑みを浮かべる。

笑うと、瞳がますます明るくなる。

まるで少年のようだ。目の縁や唇の端の

すかなしわも、その笑顔の無邪気さを、より

一層際立たせている。

実際、何かいたずらを思いついた少年のよ

うな顔で、彼は加持の腰を引き寄せた。

「だつたら、一口だけでも返そうか」

だが加持はひょいと顔を背け、冷たい視線

だけを男に向ける。

「解ってるはずだぜ。俺はそういうのはごめんだ」

「いいじゃないか、キスくらい。私達は恋人同士なんだから」

「誰が恋人同士だ、俺はあんたとそんな関係になつた憶えは……」

「はいはい、解ってるよ」

神崎は加持の言葉を遮ると、わざとらしいため息をついた。

「君が私と寝るのは性欲処理のためでしかない。だからセックスはしても、キスはしない。それに、セックスの時以外は、その体に指一本触れるのも許さない」

「解ってんなら離せよ」

加持は、今も自分の腰にある神崎の手をじしゃりと叩く。

「だけどね、恭介」

神崎はそれでも腰のあたりを執拗に撫で回しながら、加持の耳に囁いた。

「私は君に本気なんだ。一目見た時から、私は君に夢中なんだよ。切ないね。この年になつて、こんな気持ちちを味わうとは……」

その間も、腰骨に指を這わせる。下腹部全体を軽く揉む。

「だったら少しは俺を本気にさせる努力を試みろよ」

加持は無理やり腰を浮かせて、神崎の腹にボディブローを食らわせた。

「たとえば？」

今度のは多少効いたらしく、神崎は軽く顔を顰めて、腹を擦っている。

「そうだな、元町のカフェでクロックムッシュを食わせてくれるとか、中華街の専門店でも出かけて何かとびぎり旨いものを食わせてくれるとか……」

「なんだ、腹が減っているのか」

「当然だろ。あんたが昨夜、あんなにしつこくするから……」

「そりゃ悪かった」

神崎は軽く肩を竦めて、サイドテーブルの煙草を手を取った。

「では、私にしつこくされるのを君も充分楽しんでいたと思つたのは、ただの錯覚だったんだな」

目覚めの一服を楽しみつつ、自分の胸のキスマークにちらりと視線を走らせる。

その瞬間、加持の怒りが頂点に達した。

「明人さん」

と、ベッドの端に腰かけ、神崎の名前を低く呼ぶ。

「俺はあんたと寝るの好きだよ。体の相性は

いいし、あんた、独身だから後腐れもないしね。だけど、あんたがそんな関係は嫌だつて言うなら……」

その先は、言うまでもないだろう。

俺は別の相手を見つけることにする。

どうやらそのメッセージは正確に伝わつたらしい。

「い、いや、私は今の関係に、とても満足しているよ。たとえ、この体だけでも君の役に立てるなら、実に光栄だ」

神崎は慌てて煙草を揉み消すと、加持の無表情な顔を覗き込む。怒ると加持の顔からは表情が消え失せる。

「その感謝の気持ちを込めて、どうだろう、今日は君に鎌倉山のローストビーフをご馳走したいと思うんだが……」

途端に、加持の顔がバツと輝く。

「だったら俺、伊勢海老のブイヤベースも食べたいな。それと鮑のステーキもね。あ、舌平目のポアレもいいなあ」

「全く、呆れるね。二十六歳にもなつて色気より食い気とは……」

「なんか言つた？」

「いや、なんにも。ただ、その細い体の何処にそれほどの食い物が入るのか、不思議だなと思つただけさ」



神崎は笑つて、再び加持の腰を引き寄せた。「だから、つい確かめてみたくなる。こうして君の体の内側を」

その尻の間に指を潜り込ませる。

「あ……っ」

体の中で最も敏感な粘膜ねんまくに触れられて、加持の全身がビクンと震えた。

「よ、止せよ、鎌倉に連れてつてくれるんじゃないかよ」

慌てて腰を浮かそうとしたが、今度はあつさり引き戻されてしまう。

「連れて行くよ。君ともう一度愛し合った後でね」

「冗談！ 解つてんだろ、俺はすつごく腹が減つてるんだ……っ」

「だから今の君には、これ以上、私にボディブローを食らわせる力は残っていない」

神崎は加持の耳に舌を這わせながら、指を軽く翳うらかせた。

粘膜が反射的に指を締めつける。

昨夜の行為の名残なごりでまだ濡れたところが、すかに湿つた音を立てた。

「ん……っ」

と呻いた後、加持は慌てて唇を噛み、潤みはじめた目を眇める。

「さっきの仕返しだよ」

神崎は大仰おおびょうに驚いた顔で首を振る。

「まさか。私はたでもう少しこの肌の感触を楽しみたいだけだよ。しかし私はセックスの時しか君に触れることを許されていないだろう？」

「だからセックスするつてのかわ」

「当たり前」

「俺を殺す気かよ」

「朝食を抜いたくらいで餓死する人間はいないよ」

「いいや、死ぬ！ 俺は死ぬ！ 絶対に死ぬ！」

加持は身長百八十一センチ、神崎には及ばないが、やはり日本人離れた長身の持ち主だ。が、神崎と違つて、その肩は薄く、胸は

平たく、腰も折れそうなほど細い。それでいて全身にしなやかな筋肉を纏っている。

そんな体軀ていこに似合つて顔も小さく、目鼻立ちも繊細せんさいで、髪は天然の薄茶色だし、長い腿もも

毛げに囲まれた瞳は甘く柔らかな蜂蜜色、肌は透き通るほど真っ白で、唇だけがほの赤い。

幼い頃はよくフランス人形フランスにんぎょうのようだと言われたものだ。

というのに、やたら食べる。朝は目覚めた直後にまずコーヒー、それがすんだらベーコンエッグにトーストの他、ポリッジやキツバ

ーのオイル漬、焼いたトマトやソーセージまで平らげる。

昼は職場の近くでイタリアンかフレンチのフルコース、夜はそれに何皿か追加した上、ワインを必ず二本は飲むし、チーズやデザー

トも忘れない。

加えて、サンドイッチやミートパイなどの夜食も欠かさない。

「まあ、それも仕方ないかもしれない」

加持の胸に唇を這わせつつ、神崎は細い腰を持ち上げた。

「何しろ君はIQ百七十、人間コンピュータと呼ばれる男だ。私のような凡人には解らないが、その頭脳を動かすためには、さぞ大量の栄養が必要なんだろうな」

空腹のあまり逆らう気力もない加持は、促されるまま、足を開いた。

それでも減らず口は忘れない。

「よく言うぜ、自分だつて外務省がいむしょうきつての出世頭のくせして……っ」

神崎はまたクスクス笑つて、加持の体内に自身の欲望を挿し入れる。

「君だつて知つていられるだろう。それは親や、そのまた親の七光だ」

その笑い声に反応して、加持の体が神崎をギョッと締めつける。

「ん……っ」
噛み締めた唇から声が漏れる。

「ん……ん……あ……っ」
濡れた粘膜が押し入ってきたものに絡みつく。その感触に、皮膚が粟立つ。筋肉が震える。血が沸騰する。

「あ、明人さん、明……人さ……っ」

加持が耐え切れないように自分の名を呼ぶのを聞きながら、神崎は心地よさげに喉を鳴らした。

「だが、私は七光りのせいで出世した自分を卑下するつもりはないよ。利用できるものは全て利用する主義なんでね」

そして、加持の体を深々と抉る。

「ひ……あ……あ……っ」

加持の喉から甘い悲鳴が迸る。

「しかも、そのお陰で君と知り合うこともできたんだからね」

その時のことは、むしろ加持もよく憶えていた。

あれは今から二年前、ロンドンの日本大使館が主宰したパーティでのことだった。

出席者はロンドンで活躍する日本人。その一人として加持も招かれた。

最初は断るつもりでいたのだ。堅苦しい席は苦手だし、たぶん自分以外の出席者は腹の出たオッサンばかり、どうせ話など合うわけがない。

なのに、行く気になったのは、日本大使館の料理とワインは超一流だという噂を聞きつけたからだ。それでわざわざタキシードを身に付けてメイ・フェアの外れの日本大使館に向いたのだ。

ところが、パーティは立食形式。確かに料理は凝ったものばかりだったが、冷めている上に、乾いている。その上、ワインもシャトー・ラトゥールやシャトー・マルゴーなどの高級品が並んでいたが、どれも当たり年とはほど遠いものばかり。

しかもオッサン達は、加持の若さと美貌を珍しがって、何かと話しかけてくる。

「あーあ、来るんじゃない……」

それでも空腹だけは満たして帰ろうと、加持はそこの料理を皿に盛り、パーティ会場の外に出た。

そこは長い廊下だった。

アルコールごとに休憩用の椅子が置いてあるが、パーティは今がたけなわ、人の姿は全くない。

腰かけようとして、気がついた。

アルコールの壁にはそれぞれ絵がかかっている。

その一点に、加持の目が釘づけになった。

「カペリーニ……」

その絵は、聖書で御馴染み、天使長ミカエルが悪魔の化身である竜を滅ぼす場面を描いたものだった。ルネッサンス期の画家であるアレックスサンドロ・カペリーニの作品だ。

とはいえ、むしろ複製。本物はミラノのカペリーニ美術館に納められている。

それに、カペリーニはそれほど有名な画家ではない。本国イタリアでもその名を知る者は多くない。

「珍しいな。どうせ複製なら、ラファエロだのダ・ヴィンチだの、もっと有名なのを飾りやいいのに」

加持は皿とグラスの中身を平らげながら、一人、呟いた。

「でも、ま、悪くない趣味だな。この絵はカペリーニの一番の傑作だし……」

その時、ふいに耳許で声がした。

「私もそう思う。このミカエルは、実に美しい」

低い、甘い響きを持った声。

「そして、君はこの天使にそっくりだ」
加持の全身が強ばった。

これはデジャ・ヴユか。

それとも時間が逆行したのだろうか。

あの時も同じ台詞を囁かれた。

やはりこの絵の前で。

鼓膜を震わせるバリトンの声で。

君はこの天使にそっくりだ……。

だが、しばらくしてから気がついた。あの

時の台詞はイタリア語だったが、今の台詞は

日本語だ。

それでも慌てて振り返った瞬間、今度は軽

い眩暈を覚えて、後ずさる。

そこには一人の男が立っていた。

年は三十半ばくらい。

驚くぐらい長身で、信じられないほど整っ

た顔立ちをしている。漆黒の髪をオールバッ

クに整え、一目でサヴィル・ロー製と解る仕

立てのいいスーツを身に纏い、ぴかぴかに磨

き上げた、オックスフォードタイプの靴を履

いている。

それも同じだ……。

もっとも、加持の記憶にある男は金髪だっ

たし、身に着けるものは全てイタリア製だっ

たが。

それでも、服装の趣味のよさや、際立った

容貌、その年代特有の落ち着いた物腰は、兩

者に共通していた。

それに、低いが、甘い響きを持つ声も。

その声で、男はさらに囁いた。

「しかし、知らなかったな。これほど大食漢

な天使がいるなんて」

そして、加持の手から空になった皿を奪う

と、代わりに自分の持っていた皿やグラスを

押しつけた。

「だったら、これもどうぞ。確か北イタリア

製のプロシュートと辛口のスパマンテは君の

好物だろう？」

確かにそれらは加持の何よりの好物だ。

思わず喉がゴクンと鳴る。

「あ、じゃあ、遠慮なく……」

と礼の言葉もそこそこ、口にする。

プロシュートはねっとり甘く、スパマン

テは爽やかに弾けて喉を通った。

「知らなかったな。パーティ会場にこんな

があつたなんて……」

加持は満足そうに呟いた。

「なかつたさ」

男は軽く片目を瞑り、再び空になった皿や

グラスを手近な椅子の上に置く。

「キッチンから失敬してきたんだ。来週、イ

タリアの外相が来るのに備えて用意していた

ものらしい」

その時になって、加持はようやく気がつい

た。

「でも、どうして俺の好物を？」

「悪いが、君のことを調べさせてもらった」

「え……？」

「加持恭介、二十四歳。国際政治のアナリス

ト。イタリアへ留学してルネッサンス美術を

学んだ後、イギリスで国際政治を学び、その

後はロンドンのシンクタンクで国際テロ組織

に関してのレポートを数多く書く……」

加持は呆気に取られて、男の顔を見つめて

いた。

「どうして、そんなことを……」

確かに男の言ったことは本当だ。

加持は国際情勢の分析にかけてはオックス

フォード大学の学生だった頃から驚異的な才

能を発揮していた。

そこを見込まれ、イギリス政府御用達の半

民間シンクタンクに、初の日本人として就職

した。

以来、加持が書いたレポートは、イギリス

政府だけでなく、他国の政府、巨大企業から

も多大な信頼を得ている。それゆえ、幾多の

優秀な同僚を差し置いて、たった半年で、お

まけに最年少で、上級アナリストに昇進した

のだ。

そんな加持の経歴は、むろん世間で広く知

られている。だから、このパーティに招かれたのだ。

しかし、加持が以前、イタリアで美術を学んでいたことを知る者は滅多にいない。

それに、加持の書くレポートが国際テロ組織に閱してのものであると知る者はさらに少ない。シンクタンクの機密事項であるからだ。でなければ、加持の命が危うくなる。レポートはそれほど正確なものだった。

なのに、この男は知っていた。

「あなた、いったい……」

「憶えていないのか？」

男が含み笑いを浮かべて言う。

「パーティがはじまった直後、大使の次に挨拶したはずだが」

加持は俯き、考え込んだ。

正直、憶えていなかった。

あの時はワインの銘柄を確かめるのに夢中だったのだ。

「だったら、改めて自己紹介しよう」

神崎が優雅に腰を屈めて一礼した。

「私は神崎明人。ロンドンの副大使を務めている」

「ああ、それで……」

加持は大きく頷いた。

シンクタンクの職員は皆、詳しい身元調査

を受けている。生まれ育ちや学歴はもちろん、好きな食べ物や交友関係まで。

たぶん神崎は、イギリス政府に頼んで、それを取り寄せたに違いない。

「にしても、優秀なんだな。その年でロンドンの副大使だなんて……」

加持は感心して呟いた。

「別に若くはないさ」

神崎は少し照れたような顔で微笑んだ。

「実を言うと、私の家は三代続いた外交官でね。祖父も父もロンドン大使を経験しているんで、私も十五の時までここで育ったんだ。

たぶん外務省がそれを特別に考慮してくれたんだろう」

しかしそれだけで日本の外務省がこの男を異例に出世させたとは思えない。

日本の外交官には階級がある。トップはむしろアメリカで、次席が中東、続いてヨーロッパ。

その中で、ロンドンだけは別格だった。ワシントンやニューヨークに派遣されるより栄誉だという風潮すらある。

たぶん、この男は、その榮譽に見合った実力の持ち主なのだろう。

それは彼の情報収集能力の高さからでもよく解る。

「だが、その馴染んだロンドンの暮らしも、もうすぐ終わる」

神崎は少し淋しげな口調でそう言って、ジャケットの内側から煙草を出すと、吸ってもいいかと首を傾げる。

加持は軽く頷き、そっけない口調で会話を続けた。

「でも、どうせ榮転でしょ？ 次はどっかの国の大使サマか、ワシントンかニューヨークの副大使……」

「いや、帰国するんだ」

「帰国？ どうして？ なんか不祥事でもやらかしたの？」

加持の率直な問いかけに、男は紫煙を吐きつつ苦笑する。

「いや、官房長官の命令で、ICCを立ち上げることになったんだ」

「ICC？」

「国際文化交流機構の略称さ。その活動目的は、日本独自の文化を通して、世界各国と交流すること」

加持は怪訝な顔をした。

国際文化交流のための組織なら、文化庁や文部科学省にもあるはずだ。その二番煎じのような組織を、何故わざわざ外務省のエリート官僚に作らせるのだろうか。

加持がそんな疑念を持つことは、神崎もむろん承知していたらしい。

「……というのは表向き」

笑いながらそう言った。

「本当の目的は、文化交流を名目に、各国首脳と会談を持ち、国際テロ組織への対応を話し合うことにある」

それから、ふいに真剣な目で加持の顔を覗き込む。

「君も知っているだろう。つい先日、日本の総理が発砲されたことは……」

「ああ。日本の極左組織が稲本総理を遊説先で暗殺しようとしたってやつだろ」

「公式発表では、そうだ」

「つてことは、ホントは違うの？」

神崎が頷く。

「事前に、有名な国際テロ組織から予告が来ていたんだ」

にわかに、加持の顔色が変わる。

「なのに、総理は遊説に出たのか？」

「ああ、それも通常の警護体制で」

「どうして……？」

「テロには屈しないというのが稲本総理の方針だから……というより、世界的に有名な国際テロ組織に自分の豪胆さを見せつけたかったんだらうな」

「そういうのは、豪胆じゃない！ 低能って言うんだ！」

加持も国際情勢の専門家だ。当然、その事件の結末も知っている。

遊説先で狙撃された総理は掠り傷一つ負わなかったが、総理を庇ったSPが一名殉職した。

日本政府にテロへの真剣な取り組みがあれば出なくてもすんだ犠牲だ。

「政府の対応が甘かったことは解っている」

神崎は神妙な顔で頷いた。

「だからこそ、事件再発を防ぐだけでなく、テロそのものを撲滅するため、世界各国と連携することを考えたんだ」

「その窓口機関がICC？」

「ああ。メンバーは私を含め、各省庁からの出向者を揃えている」

「で、表向きは文化交流ってことで、各国首脳と話し合うわけだ」

「我々の動きを、なるだけ国際テロ組織に知られたくないからな」

「バックみたい。そんなの、できっこないじゃん」

加持は無遠慮に吐き捨てた。

「あのさあ、世間じゃテロリストなんてただのならず者だって思われてるけど、今や第三

世界の国家や財閥をバックに持つ、軍事、政治、経済、あらゆるジャンルのスペシャリスト集団なんだぜ。中には著名な画家や音楽家までいるんだ。そんな連中の目を誤魔化して、日本の役人が各国のお偉いさんところこそ話し合うなんて……」

「無理だろうな」

神崎はあっさり頷いた。

「私を含め、日本の役人には、国際テロ組織についての知識も分析力もなさ過ぎる。しかも文化や芸術に関してはからきしだ」

「だったら、なんで……」

「しかし、君ならできる」

「はあ？」

「君は国際テロ組織に関しては専門家である上、芸術の本場イタリアで学んだ経験まで持っている。ICCにこれほどぴったりの人材はない」

「はああ？」

「だから是非、ICCのメンバーになってほしい」

「な、何言ってるんだよ。ICCのメンバーは各省庁からの出向者を揃えてんだろ」

「一人くらい例外があってもいい」

「でも俺には仕事……」

「それなら大丈夫。シンクタンクにはイギリ

ス政府を通じて、もう君を貰い受ける話を通してある」

「な、なんだと！ よくもそんな勝手なことを……っ」

「君を得るためならなんでもやるさ」

「へえ、なんでも、ねえ。言っとくけど、俺はこう見えてもかなりの高給取りなんだぜ。ICCでも同じくらい出せるわけ？」

「それは無理だが……」

「じゃ、断る」

「しかし私はどうしても君に日本へ戻ってほしいんだ。そして、ICCのため……いや、日本人の一人として、祖国のために働いてほしいんだよ」

神崎は、アルコーブに備えつけの灰皿で煙草を揉み消すと、加持の手を掴んでぐっと握った。

「冗談！」

加持は慌ててその手を引き抜こうとしたが、神崎はそれを許さない。仕方なく、目の前にある端整な顔を思い切り睨みつけた。

「あんた、俺のこと調べたんなら知ってるだろ。俺はガキの頃から自分が日本人だなんて意識したこたないし、日本が祖国だと思っただこともないんだ」

その視線をものともせず、神崎はにっこり

微笑んだ。

「ああ。君が、両親の遺産のお陰で、給料なんか貰わなくても食うには困らない身の上だということもね」

加持は京都の生まれだ。しかし、そこで過ごしたのは六歳まで。

その後、十八歳までをスイスの私立学校で過ごし、いったん帰国して日本の大学に入ったものの、三年の時にイタリアへ留学、翌年イギリスに渡って、今に至る。

メイ・フェアに、近代的なキッチンと二つの広い寝室を持つタウンハウスを借り、平日はロンドンの中心地であるシテイで国際テロ組織についてのレポートを書き、週末はピカデリーやソーホーのクラブで過ごす日々を送っている。

「俺は今の生活に満足してる。それを諦める気なんかない。それもろくに暮らしたこともない日本のためなんか……」

「だろうな」

神崎は再び額くと、まだ握ったままの加持の手を持ち上げる。

「だが、私も諦める気はない。ICCには君が必要なんだ。そして、私にも」

その手にゆっくりと口づける。

「どうやら私は君に一目惚れしたらしい」

その瞬間、加持の頭がぐらりと揺れた。

「おかしくなりそうだ……」

やはり同じだ。あの時と。

加持にはもうこれが現実なのか、自分の願望が見せた夢なのか解らなくなっていた。それとも、これは久しぶりに口にしたスプマンテのもたらした酔いなのか。

それでも目の前の男を必死に睨み続ける。

「あのさ、神崎さん、いくらもうすぐ帰国するたって、あんた、今はまだこの大使館の職員だろ。なのに、職場で民間人を口説く気かよ」

「明人、だ」

「え？」

「君にはそう呼んでもらいたい」

何をバカなこと言ってるんだ、どうして俺が会ったばかりの男のファーストネームを呼ばなきゃならないんだ……とは思ったが、気がつくくと、加持の唇は勝手にその名を呼んでいる。

「明人、さん……」

神崎は満足そうに微笑んだ。

「いい子だ」

そう言っただけ、加持の額にも口づける。

「君のそのシルクのように滑らかな声で呼ばれるとゾクゾクする」